

六 花



2011 平成23年
俳句雑誌りつか

2月号

Cover designed by Little Bird

わたつみの遙は円し冬の虹

竹灰に朝の霧雨降りだしぬ

四斗樽に小銭差しあり節分会

矢印の釘錆びぬたる梅の山

押して引く鞆鳴りけり餅花に

松ヶ枝を垂りし雪の降り来たる

襟立てて来るは父なり名残雪

日本海まなじりに入れ海苔を搔く
火事跡の鍋を返してをりにけり
じくじくと庭解け来たる忘霜
万歳のはたきに軍手雪だるま
野狐のふはりと雪の闇に跳ぶ
松の内過ぎたる夜の縁濡るる
虎河豚の灰汁を舐め見る鍋奉行

わ 脇道に山茶花散り敷きみたりけり
た 立つ波に如月の日の踊りをり
し 漆黒の梁を誇りて炭熾す
や 家鳴して窓に目をやる雪夜かな
お 白粉のやうな二月の日を纏ふ
ま まばらなる霜に日の差す朝かな
え 襟巻を押さへる指の細さかな

に 庭の枝に刺せし蜜柑の凍ててをり
か 軽々と雪積む中を駆くる鹿
じ 上弦の月冴ゆる夜に痛かりき
ば 梅園の蕾の尖とがり隠す雪
の 鋸の音冴え冴えと聞こえ来し
ま 瞬まばたくや睫毛に差せる二月の日
と 解く髪に冴ゆる匂ひのしたりけり

しろがねの月をまぢかに鹿ねむる 梶浦玲良子

しろがねのつきをまぢかにしかねむる かじうられいりようし

ひらがなのこほろぎの来る暈かな

剥製の雉子に紅刷く帰燕かな

かまきりの身を立て直す仁王門

枇杷の子の谷を出るときふり返り

鹿の鳴き声もしなくなつた。鹿も人も眠りについているころ。銀色の月が煌煌と照っている。手を伸ばせば届きそうだ。「月をまぢかに」という表現が、月のほかには何もない、空気の澄み切った深山を想起させる。簡潔で印象明瞭な作品。掲句を短冊か色紙に書くに相応しい秀句。私は即時に但馬地方の竹田城址や丹波の鹿集（かたかり）城址の月を思い起こす。鹿の句といえば「鹿啼くや夜露が霜に変はる頃 ことり」や「水分れの土舐めてある冬の鹿 はりまだいすけ」があるが、これらに勝るとも劣らぬ。時代の洗礼を受けても残っていく不易の作品。

雪 卿 集

雪達磨

貝森光洋

耳の奥木枯し棲む日もありにけり
北欧の空の渋滞クリスマス
酔っぱらいの相手している雪達磨
雪達磨得意の一手は寄倒し
父勤務雪達磨となりて帰宅せり

仏聖田

松本文一郎

天高く仏聖田の群雀
木犀の恨みは深し一夜雨
大皿に鯨の天麩羅抓み塩
重陽や垂しとの真白き献上酒
間歇に鳴いてをりけり昼の虫

せつじゆしゆう
雪樹集

七 草

筒井八重子

元旦や雪を冠りて並ぶ屋根
ずるずると押されて押して初詣
初詣みくじ楽しく結はへたる
七草の湯気ごと粥を啜りけり
空晴れて物干日和風花す

色 の 名

空

音

冬紅葉日の当たたる山陰る山
久方の隙間風なり中二階
かに鍋や口と一緒に手も動き
命とは時間といふ師聖夜祭
色の名のあまたある国十二月

蛍雪譚 六甲

酔っぱらいの相手している雪達磨 貝森 光洋

酔っぱらいの相手を雪達磨がしている。普通の人間なら「うるさい！」とかなんとか言つて酔っぱらいに腹を立てるかもしれぬ。が、物事を達観したような雪達磨は表情を変えずに聞き入ってくれる。酔っぱらいは人間と思ひ込んでくだを巻いている。が、そのうち人間ではないことに気がついた。と思いきや「どうもすいませんでした」と雪達磨に謝つて、千鳥足で雪の中をぐらぐら去つていくのである。判つているようで判つていない酔っぱらいと雪達磨を上手く絡ませたおかしみがある。

同時作「父勤務雪達磨となりて帰宅せり」は雪まみれになつて仕事先から帰宅した父の姿から子どもや妻の気持ちにまで連想が及ぶが、果たして父勤務が必要かどうか推敲の余地がありそうだ。「耳の奥木枯し棲む日もありにけり」は「も」が気になる。現在の状態として詠んだ方が焦点がはつきりすると思うのだが……。(以下略)

六花集

水鳥の光巻き上げ発ちけ
初晴や雪のしづくのとどめな
移り香のとどまりぬたる晴着
寒月の一の枝余さず照らし
糸玉の転がりしまま毛糸編む

新蕎麦を打つ出湯へと山
哲学者めく夫の背や落葉降
単線駅の舎に開く菊花展
独り居の夜長端切れの海
短日や別離の卓のあれやこれ

吹く風に音のきはまる冬木立
田の面やかかげ長々と秋の暮
もみを焼く田づらしぐぐる秋の暮
くまつづら目白押し合ふ声か
残る菊採りてにはかに風寒し

菊
谷
潔

平
居
濤
子

藤
生
昇
三